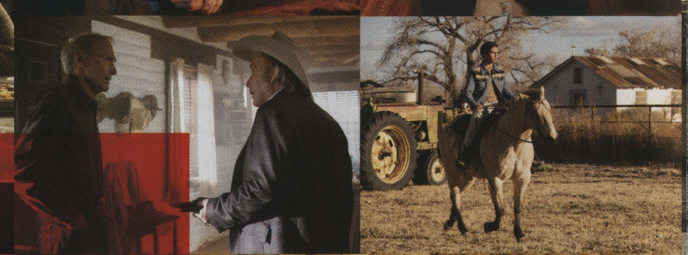
イーストウッドが描く真の[強さ(マッチョ)]—。あなたの価値観を変える、感動がここに。

INTRODUCTION

半世紀以上にわたり一線で活躍を続ける名優にして、『許されざる者』『ミリオンダラー・ベイビー』で監督として2度のアカデミー賞®に輝いたクリント・イーストウッド。監督デビューから50年、40作目となるアニバーサリー作品『クライ・マッチョ』は、彼が監督・主演を務める新たなマスターピースだ。落ちぶれた元カウボーイと少年の旅を通して語られる人生とは—。喜びや悲しみを背負い、なお人生を歩み続ける。生きる上で必要な[強さ]とは何かを温かく、時にユーモラスに時に切なく語りかける。40年前から検討されていた原作の映画化に、イーストウッドが満を持して向き合った本作は、まさに彼の集大成にして新境地。2022年の年明けは、この感動から始まる!



STORY

誘拐から始まった少年との出会いが、二人の人生を大きく変えてゆく—

アメリカ、テキサス。ロデオ界のスターだったマイクは落馬事故以来、数々の試練を乗り越えながら、孤独な独り暮らしをおくっていた。そんなある日、元雇い主から、別れた妻に引き取られている十代の息子ラフォをメキシコから連れ戻してくれと依頼される。犯罪スレスレの誘拐の仕事。それでも、元雇い主に恩義があるマイクは引き受けた。男遊びに夢中な母に愛想をつかし、闘鶏用のニワトリとストリートで生きていたラフォはマイクとともに米国境への旅を始める。そんな彼らに迫るメキシコ警察や、ラフォの母が放った追手。先に進むべきか、留まるべきか? 今、マイクは少年とともに、人生の岐路に立たされる——。

"Academy Awards®" is the registered trademark and service mark of the Academy of Motion Picture Arts and Sciences.

監督50周年記念作品

今こそ、本当の強さの意味を問う

誘拐した男と、さらわれた少年。逃亡の果てに二人が見つけた〝生きる〟道とは—。

クリント・イーストウッド

クライ・マッチョ

ワーナー・ブラザース映画 提供
マルパソ/アルバート・S・ラディ 制作 クリント・イーストウッド "CRY MACHO" WITH ドワイト・ヨーカム 音楽 マーク・マンシーナ
衣装 デボラ・ホッパー 編集 ジョエル・コックス A.C.E. デヴィッド・コックス 美術 ロン・リース 撮影 ベン・デイヴィス BSC
原作 N・リチャード・ナッシュ 製作総指揮 デヴィッド・M・バーンスタイン 脚本 ニック・シェンク AND N・リチャード・ナッシュ
製作 アルバート・S・ラディ p.g.a. ティム・ムーア p.g.a. ジェシカ・マイアー p.g.a.
製作/監督 クリント・イーストウッド

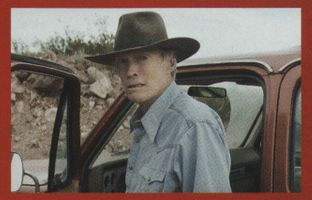
2022.1.14 fri

監督デビュー50周年記念作品。
クリント・イーストウッドの集大成かつ新境地―。

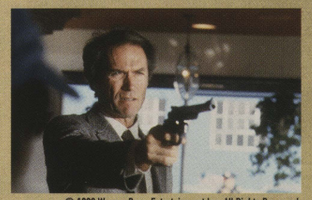
勇気、希望、友情、そして愛…
これまで数々の人生を描いてきたイーストウッドの名台詞

文＝芝山幹郎（評論家・翻訳家）

『クライ・マッチョ』のなかで、クリント・イーストウッドの扮するマイク・マイロが、少年ラフォに向かってこんな台詞を吐く場面がある。字幕ではこうなっていた。**「人は自分をマッチョに見せたがる。……すべての答えを知ってる気になるが、老いと共に無知な自分を知る。気づいた時は手遅れなんだ」**



イーストウッドの好みそうな台詞だ。昔から、映画のなかの彼はいくつも名台詞を吐いてきた。だれもが知っているのは、『ダーティハリー4』（1983）の**「Go ahead, make my day.（撃ってみろ。望むところだ）」**の一行だろう。タフガイの役が多かったせいか、初期のイーストウッドには勇ましい台詞が多い。だが、年齢を重ねるにつれて、もっと陰翳の深い台詞を口にするようになる。

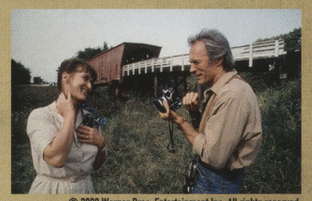


© 1983 Warner Bros. Entertainment Inc. All Rights Reserved.

たとえば、名作『許されざる者』（1992）のなかにはこんな台詞が出てくる。**「人を殺すのは大変なことだ。相手のこれまでの人生をすべて奪い、未来までもそっくり奪うことになる」**

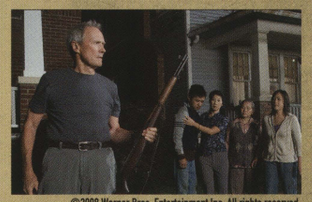
© 1992 Warner Bros. Entertainment Inc. All Rights Reserved.

あるいは、少しあとの『マディソン郡の橋』（1995）にも渋い台詞があった。**「昔の夢はいい夢だった。成就しなかったが、見ていて楽しい夢だった」**



© 2008 Warner Bros. Entertainment Inc. All rights reserved.

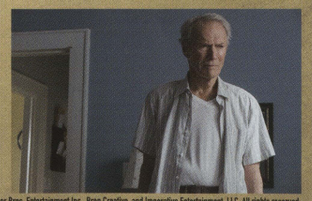
だが、イーストウッドの本領は、アイロニーとふくみ笑いを伴う辛辣なひと言を放つときに発揮される。『グラン・トリノ』（2008）の主人公ウォルト・コワルスキーは、街角でからんできたチンピラにこう言う。**「からんじゃいけない相手に、たまに出くわすときがあるってことに気づかないのか。俺がそういう相手だよ」**



©2008 Warner Bros. Entertainment Inc. All rights reserved.

あるいは『運び屋』（2018）の中で、思わずくすりとさせられたこんな台詞。**「100まで生きたいと思う奴は、99歳の老人だけだ」**

人生の深淵を覗かせる言葉も、相手をあっさり武装解除させてしまう減らず口も、イーストウッドにはよく似合う。彼は、アクションの達人であると同時に、言葉の達人でもあった。映画のなかだけでなく、過去のインタヴューなどでの発言にも面白いものが多い。締めくくりに、少しだけ紹介しておこう。**「私はペシミズムを信じない。事態が思うように運ばないときは、前に進め。雨が降りそうだと思うと、本当に降るものだ」**



もうひとつ、おまけを。**「道理をわきまえた人間になろうとしたことはあった。でも、そんな自分が気に入らなくてね」**

© 2018 Warner Bros. Entertainment Inc., Bron Creative, and Imperative Entertainment, LLC. All rights reserved.

心の深みを測り直す知恵

文＝芝山幹郎（評論家・翻訳家）

イーストウッドの背後にイーストウッドが見える。見るなといわれても、見えてしまう。もし、『クライ・マッチョ』で初めてイーストウッドという俳優を知ったとしたら、私は一体どんな印象を抱くのだろう。強靱と思うか。透明と思うか。それとも異様と思うのか。

だが私は、1950年代から彼の姿を見つづけてきた。幼時も青年時代も中年期も、そして年老いてからも、イーストウッドはいつも私の前を歩んでいた。

タフガイだったり、ゴーストだったり、人生の導師だったり、謎の男だったり……姿形はその都度異なっても、イーストウッドならではの平叙体に変化はなかった。自身の背中で「映画の風」を感じ取り、その風を信じる帆船のように、大股で悠然と歩んでいた。

その歩調は『クライ・マッチョ』でも変わっていない。銃は撃たないし、鉄拳もあまり振るわないが、10時10分の角度で車のステアリングを握り、馬や犬や羊の鼻面をそっと撫でるイーストウッドの手は、『ダーティハリー』や、『ブロンコ・ビリー』や、『許されざる者』に出てきた手とつながっている。

いいかえれば、イーストウッドは年齢を言い訳にしていない。衰えは衰えとして受け止めつつ、そのときどきに可能な最良の形をクールに示している。だからこそ、彼は眼の輝きを失わない。心の深みを何度も測り直したかのような知恵の光が、後方を歩むわれわれの足もとを照らしつづけてくれる。

2021年 アメリカ映画／上映時間:104分／スコープサイズ

crymacho-movie.jp #クライマッチョ @warnerjp @warnerjp_official WBondemand

Filmarks（フィルマークス）

イーストウッド監督40作品

1971年 恐怖のメロディ
1973年 荒野のストレンジャー
1973年 愛のそよ風
1975年 アイガー・サンクション
1976年 アウトロー
1977年 ガントレット
1980年 ブロンコ・ビリー
1982年 ファイヤーフォックス
1982年 センチメンタル・アドベンチャー
1983年 ダーティハリー4
1985年 ペイルライダー
1986年 ハートブレイク・リッジ／勝利の戦場
1988年 バード
1990年 ホワイトハンター ブラックハート
1990年 ルーキー
1992年 許されざる者
★アカデミー賞®作品賞・監督賞
1993年 パーフェクト ワールド
1995年 マディソン郡の橋
1997年 真夜中のサバナ
1997年 目撃
1999年 トゥルー・クライム
2000年 スペース カウボーイ
2002年 ブラッド・ワーク
2003年 ミスティック・リバー
2003年 ピアノ・ブルース
2004年 ミリオンダラー・ベイビー
★アカデミー賞®作品賞・監督賞
2006年 父親たちの星条旗
2006年 硫黄島からの手紙
2008年 チェンジリング
2008年 グラン・トリノ
2009年 インビクタス／負けざる者たち
2010年 ヒア アフター
2011年 J・エドガー
2014年 ジャージー・ボーイズ
2014年 アメリカン・スナイパー
2016年 ハドソン川の奇跡
2018年 15時17分、パリ行き
2018年 運び屋
2019年 リチャード・ジュエル
2021年 クライ・マッチョ

※日本劇場公開作品